

日本におけるスポーツボランティアの概念化 に関する質的研究

—スポーツボランティア文化の構築に向けて—

山口 志郎*

Sheranne Fairley** 伊藤 央二***

抄録

日本は、ラグビーワールドカップ 2019、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会、関西ワールドマスタースゲームズ 2021 を開催予定であり、これらのイベントには多数のボランティアが必要となる。スポーツボランティア研究における多くの研究は西洋諸国で行われ (Cuskelly, Hoye, & Auld, 2006; Fairley, Lee, Green, & Kim, 2013)、文化的な差異がボランティアの意味に及ぼす影響や、日本人のスポーツイベントに対するボランティア動機についてはほとんど知られていない。そこで本研究は、(1) 日本におけるスポーツボランティアの概念化と (2) 地域スポーツイベントと全国・国際スポーツイベントの比較を通し、スポーツボランティア参加者の動機の類似・相違点を明らかにすることを目的とした。データは、館山わかしおトライアスロン大会 (地域スポーツイベント) と神戸マラソン (全国・国際スポーツイベント) においてフォーカスグループインタビューを通し収集した。分析結果から、日本人は個人が報酬を受け取らない活動をボランティアとして定義していることが示された。さらに、ボランティア活動は、利他性、人助け、自己犠牲として概念化されていただけでなく、ボランティア参加は個人のお金と時間の裁量 (ゆとり) にも影響を受けていた。一方、スポーツイベントボランティアの動機のカテゴリーは、楽しい、相互利益、場所/コミュニティへの同一性、貢献の 4 つに分類された。さらに、地域スポーツイベントにおけるボランティア活動の動機は、全国・国際スポーツイベントにおけるボランティア活動とは異なっていた。具体的には、地域スポーツイベントにおけるボランティアは、楽しい、相互利益、地域コミュニティへの同一性を披露することであったが、全国・国際スポーツイベントにおけるボランティアは、楽しさや自分自身のスキルと能力を通し社会に貢献することに動機づけられていた。

キーワード：スポーツボランティア，概念化，質的研究，動機，文化的視点

* 流通科学大学 〒651-2188 兵庫県神戸市西区学園西町 3-1

** クイーンズランド大学 St Lucia Qld 4072 Australia

*** 和歌山大学 〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930

Understanding conceptualisations of Japanese sport volunteers in qualitative research

—Building a culture of sport volunteers—

Shiro Yamaguchi *
Sheranne Fairley ** Eiji Ito***

Abstract

Japan will be host to the 2019 Rugby World Cup, the 2020 Tokyo Olympic Games, and the Kansai World Masters Games 2021. These events will require a considerable number of volunteers. The majority of research on sport event volunteers has been conducted in western countries (Cuskelly, Hoye, & Auld, 2006; Fairley, Lee, Green, & Kim, 2013). We know little about how cultural differences impact the meaning of volunteer roles in Japan and what motivates Japanese citizens to volunteer for sport events. This study investigates: (1) Japanese conceptualizations of sport volunteers; and (2) the similarities and differences in volunteer motivations between local sport events and national/international sport events. Data were collected through focus group interviews of volunteers at the Tateyama Wakashio triathlon (a local sport event) and the Kobe marathon (a national/international sport event). The results showed that Japanese defined volunteering as a voluntary activity where individuals do not receive a reward. Further, volunteering was conceptualized as altruistic, an opportunity to help people, and sacrificing one's self. Participating in volunteer opportunities was dependent on the availability of one's discretionary time and money (Breadth of mind). Four categories of motives for sport event volunteers were identified: fun, mutual benefits, place/community identity, and contribution. Further, motives for volunteering at a local event differed from volunteering at an international event. Individuals volunteer for local sport events for: fun, mutual benefits, and showcasing the local community identity. On the other hand, international event volunteers were motivated by fun and being able to contribute to society through sharing skills and abilities.

Key Words : sport volunteers, conceptualization, qualitative research, motivation, Cultural perspective

* University of Marketing and Distribution Sciences 3-1 Gakuen-Nishimachi, Nishi-Ku, Kobe, Hyogo 651-2188 Japan

** University of Queensland St Lucia Qld 4072 Australia

*** Wakayama University Sakaedani 930, Wakayama-city 640-8510 Japan

1. はじめに

2019年からはじまるメガ・スポーツイベント開催に向け、様々な施策が展開される中で、近年ボランティアへの興味関心が高まっている。ボランティアは、イベントを成功するうえで、必要不可欠な構成要素だと言われており (Kemp, 2002)、ロンドンオリンピックでは大会ボランティアと都市ボランティア合わせると約7万8,000人、リオオリンピックでは、大会ボランティアとシティ・ホストを合わせると約5万1,700人が活動を行うなど (東京都・公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック組織委員会, 2016)、メガ・スポーツイベントを開催するうえで必要不可欠な存在となっている (Cuskelly, Hoye, & Auld, 2006)。東京都・公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック組織委員会 (2016)によると、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の際には、大会ボランティアと都市ボランティア合わせて9万人以上の活躍を想定していることから、今後ボランティアマネジメントの議論は、活発に行われることが予想される。

しかしながら、我が国の1年間のスポーツボランティア実施率は、7.7%と報告されており (笹川スポーツ財団, 2014)、1994年からの20年間を経年でもほぼ横ばいの状態である。こうした原因の一つとして、ボランティア参加における一過性の問題が挙げられる。この20年間で「ささえるスポーツ」としてのスポーツボランティアが社会的に認知され始めているが、ボランティアと言いつつも自発的ではなく、依頼されて活動しているケースも少なくない (松岡・小笠原, 2002)。近年は、スポーツイベントのスポンサーになった企業の社員がスポーツボランティアになるケースや、地域スポーツイベント開催の際、地元の教育機関に依頼するケースが多く、そうしたスポーツボランティアは一過性にならざるを得ないのが現状である。

また、日本スポーツボランティアネットワークの調査 (2015)によると、スポーツボランティア活動における課題として、「メンバーが高齢化し、後継者が不足している」、「活動内容に関する情報が少ない」、「募集がわかりにくい」などを挙げている。そのため、イベント主催者は、スポーツボランティアのニーズに応えるため、インターネットやSNS、メールリストなどを活用し、ボランティア募集や保持を行っている。しかしながら、年齢や性別によってスポーツボランティアの情報入手経路は異なることから、イベント主催者はボランティア募集や保持のためのマーケティング戦略を最適化する必要がある (山口ら, 2010)、その際ボランティアの

動機を理解することが重要である (Fairley, Gardiner, & Filo, 2016)。

塩田・徳井 (2016) は、欧州連合が28カ国を対象に行った調査を概観した結果、スポーツボランティア実施率の差は、単にスポーツやボランティアという側面ではなく、その国の社会文化的な背景など様々な要因が影響すると述べる。文化的な差異については、欧米諸国とアジア諸国の間でボランティアの考え方は異なることが明らかにされており (Hustinx, Handy, & Cnaan, 2012; Fairley, Lee, Green, & Kim, 2013)、日本のスポーツボランティアの調査研究を行う際には、文化的な背景を考慮した理論的なフレームワークが必要となる。

これまで日本におけるスポーツボランティアの研究は、記述レベルが多く (e.g., 山口, 2004; 日本スポーツボランティア学会, 2008)、概念化を試みた研究はほとんど行われていない。また、スポーツボランティアの動機に関する研究は、2000年代半ばまで盛んに行われていたが (e.g., 長ヶ原, 1991; 松岡・小笠原, 2002)、それ以降ほとんど研究が進んでいない。ボランティアを行う人々のニーズは時代と共に移り行く可能性があり、メガ・スポーツイベント開催に向け、改めてボランティアの動機を明らかにすることが必要だと考えられる。

2. 目的

本研究の目的は、(1)日本におけるスポーツボランティアの概念を文化的な視点から探り出し、(2)地域スポーツイベントと全国・国際スポーツイベントの比較を通し、スポーツボランティア参加者の動機の類似・相違点を明らかにすることである。目的

(1)を達成するために、本研究では日本文化といった視点からデータ分析を行うことから、理論的枠組みとして文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991)を用いる。このフレームワークによると、日本を含む東アジア文化圏の人々は、一般的に相互協動的自己観を共有し、自己とは周囲の人々や物事と密接に関わりあっている存在し、ある特定の状況や他者の性質によって定義されるものであるという信念を持っているとされている。近年、スポーツボランティアを考える上で文化の影響は無視できないと報告されているように (Fairley, Lee, Green, & Kim, 2013)、文化的自己観のフレームワークは日本、そして世界のスポーツボランティア研究に有益な視座をもたらすことが期待される。

さらに目的(2)を達成するために、本研究ではスポーツボランティアを2つのカテゴリーに分類し (①地域スポーツイベント、②全国・国際スポーツ

イベント)、カテゴリーごとにフォーカスグループインタビューを実施することとした。スポーツイベントの規模によって、ボランティアの動機は異なることが予想される。また、活動内容や役割などによっても、ボランティアの動機は異なる可能性もある。

2つの研究目的について、国内での研究報告や知見が非常に限定されていることから、本研究では探索的研究として仮説ではなく、以下のリサーチ・クエスチョンを設定することとした：①日本のスポーツボランティアの概念は先行研究で報告されている西洋の概念とどのように類似もしくは異なるのか？、②地域スポーツイベントと全国・国際スポーツイベントの間で、ボランティアの動機はどのように類似もしくは異なるのか？

3. 方法

3-1. 調査概要

本研究では①地域スポーツイベントとして、館山わかしおトライアスロン大会、②全国・国際スポーツイベントとして、神戸マラソンを調査対象として選出した。館山わかしおトライアスロン大会は、例年7月に千葉県の館山市で開催され、今大会で第7回目を迎えた。参加者は約1,100名であり、館山の自然を活用したトライアスロン大会を通じて、館山市のスポーツツーリズムの推進ならびにトライアスロンの普及・発展と選手の競技力・体力向上を図っている。館山市では、スポーツツーリズムの推進を図るとともに、2015年4月28日に行政としては初めてNPO法人日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)の正会員に承認されるなど、スポーツボランティアの育成にも力を注いでいる。館山わかしおトライアスロン大会では、約120名のスポーツボランティアが活動を行っている。

一方神戸マラソンは、例年11月3週目に開催されており、参加者が約2万人、ボランティアが約7,500人、沿道応援者が約60万人の全国・国際イベントである。第6回となる神戸マラソンは、過去最多となる1,482名の海外在住ランナーが申し込みを行っており、そうした外国人の増加に伴い語学対応ボランティアを前年より50人以上拡充させるなど(神戸新聞, 2016)、国内に留まらず海外でも人気を集めるイベントへと成長を遂げている。

3-2. データ収集

2016年7月3日(日)に第7回館山わかしおトライアスロン大会終了後に(大会自体は強風のため中止)、会場である沖ノ島/海上自衛隊館山航空基地特設会場においてスポーツボランティアの方16

名に対し、本調査を実施した。また、2016年10月22日(土)に神戸マラソンボランティアリーダー説明会終了後に、神戸学院大学ポートアイランドキャンパスにおいてスポーツボランティアの方16名に対し、本調査を実施した。

本研究では、フォーカスグループインタビューの手法を用い調査を実施した。フォーカスグループインタビューとは、「ある1つのテーマに向けて焦点を絞り込まれた非常に組織化された集団討論」と定義されている(Krueger, 1986, p.1)。フォーカスグループインタビューの利点には、①アイデアを生成することができる、②調査参加者についての定性的な情報を詳細に得ることができる、③テーマに対する調査参加者のニーズ、態度、特性、及び認識を把握することができる、といった3点が挙げられている(Li, Pitts, & Quarterman, 2008)。

本研究における倫理的配慮については、事前に流通科学大学のコンプライアンス委員会で審査を受け、承認を得たうえで調査を実施した。調査参加者から書類によるインフォームドコンセントならびに録音の許可を得たうえで、半構造化されたフォーカスグループインタビューを実施した。両フォーカスグループインタビューでは、4名×4グループに分け、モデレーター1名が中心となり、対象者に対し、質問を行った。質問項目は、①ボランティアとは何か、②どのような人がボランティアか、③ボランティアと呼べる人の条件、④ボランティアと呼べない人の条件、⑤どんな活動にボランティアとして参加するか、⑥館山わかしおトライアスロン大会(神戸マラソン)でボランティア活動をした動機は、⑦館山わかしおトライアスロン大会(神戸マラソン)のボランティア活動での最高の思い出は、⑧館山わかしおトライアスロン大会(神戸マラソン)のボランティア活動での最低の思い出は、⑨日常的なボランティア活動、地域スポーツイベントでのボランティア活動、全国規模のスポーツイベントでのボランティア活動における違いは、⑩ボランティア活動を妨げるものは何か、⑪ボランティア活動に駆り立てるものは何か等であり、インタビュー中は会話の展開に合わせてオープンエンドに質問を行った。調査参加者には、インセンティブとして図書券500円を配布し、調査時間は45分から60分であった。

3-3. データ分析

録音したインタビュー内容はすべて逐語化し、逐語録を作成した。本研究では、スポーツボランティアの具体的な事実をもとにしながら、一般的な原理や法則を導き出すことから、帰納的コーディングを行うこととした(佐藤, 2008)。フォーカスグループ

インタビューで得られたデータを定性的な手法を用い探索的に明らかにすることから、パターン認識 (pattern recognition) を通じて主要なテーマと意味を抽出し、テーマ別にコード化を行った (Attride-Stirling, 2001)。その際グラウンデッド・セオリー・アプローチの考え方 (Glaser & Strauss, 1967) と過去の先行研究 (Fairley et al., 2016; Fairley, Cardillo, & Filo, 2016; Lovegrove & Fairley, 2017) を基に、①オープン・コーディング、②軸足コーディング、③選択的コーディング、④理論的飽和化の過程を経てコード化を行った。

分析は、3名の研究者によって行われた。まず始めに、第1著者がインタビューデータをもとに、上記の過程に基づきコード化を行った。次に、スポーツボランティア研究における質的研究方法に精通した第2著者1名と確認・協議を行った。その際、文化的な背景を考慮することに重点を置き議論を重ねた。最後に、第3著者がスーパーバイザーとして加わり、分析結果をまとめた。

4. 結果及び考察

4-1. スポーツボランティアの特徴

インタビューデータを整理した結果、日本におけるスポーツボランティアの特徴として、6つのキーカテゴリーが生成された。(1) 無償性 (No reward)、(2) 自発性 (Voluntary)、(3) 利他性 (Altruistic)、(4) 人助け (Helping people)、(5) 自己犠牲 (Self-sacrifice)、(6) ゆとり (Breadth of mind) である。これらのテーマについては、以下で説明を行うこととする。回答者の意見を反映するため、インタビューからの引用を含んでいる。また回答者の匿名性を保護するために、数字 (1=館山、2=神戸) とアルファベット (グループ ID-グループ内の個人 ID) を割り当てることとした。例えば、(1A-D) は館山での A グループの D さんの回答例を示す。

特徴1：無償性 (No reward)

ボランティアの特徴として、一番回答者からの意見が多かったのが、無償性である。スポーツに限らず、ボランティアは、報酬、見返りを求めず活動を行うことが大事だと考えている。回答例は、以下の通りである。

“無償の自分から進んで役にたてるようにみたいな、そういう気持ちの行動がボランティアだと思います (1A-D) ”、“報酬を求めない (1C-A) ”、“代償を要求しない (1D-C) ”、“無償の愛。人として、人間同士の関りは絶対大切やって思うんで、ランナーの人が走る分、それを支える人は絶対必要やと思うん

で。恩返してっていう意味での (2B-A) ”、“お金とかじゃなくて、こっちは善意みたいな形でさせてもらっています (2B-C) ”、“無償でしている人はみんなボランティアかなと。その人の気持ちがどうであれ、無償で参加されている人 (2B-C) ”、“無償で、ようは世のため人のために何をさせていただくかというようにそんなことと思うんですけどね (2C-A) ”。“本当のボランティアはほかの人に無償で支えて、喜んでいただくってことだと思うんですけどね (2C-C) ”、“報酬っていうか、対価を求める人はボランティアではないんじゃないかなと思うんですけどね (2D-A) ”

こうした回答者の意見を読み解くと、過去の先行研究における定義と同様の見解を示しており (山口, 2000; 田尾, 2001)、日本人にとって、ボランティア活動は「無報酬で自分の労力、時間、技能を他人、社会のために提供すること」(松岡・小笠原, 2002, p.277) が重要だと考えていることが示唆される。

特徴2：自発性 (Voluntary)

ボランティアの特徴として、2番目に回答者の意見が多かったのは、自発性である。ボランティアの語源は、ラテン語の *voluntas* (ウォランタス) であり、自由意志や自主性を意味している。元々、ボランティアは英国で17世紀初頭から「志願兵」という意味で使われ始め (入江, 1999)、日本においては、1873年の徴兵制がスタートしたのに端を発し、1889年に1年志願兵制度が制定され (寺澤, 2002)、その後「志願兵」という言葉が世に広まった。こうした志願兵のルーツが、ボランティアの概念に影響を与えているかは定かでないが、スポーツに限らず、ボランティアは、自発的に活動を行うことが重要だと考えられている。回答例は、以下の通りである。

“言われたことをやるんじゃないかって、率先してこういうことをやるといいかなっていうのを自分から気が付く人が一番役に立ちますよね (2B-B) ”、“相手と対等に立ちながら、役に立つこと、自分が進んでっていうのを条件にした (1C-A) ”、“自発的に人に言われてやるのではなくて、自分ができて自分の力量で目の不自由な人に手を差し伸べるぐらいで私はやってます (2A-B) ”、“自分から本心でこういう風にしてあげたいと思って参加してる人もいれば、行ってくれと言われて行ってる人も、結局はボランティアっていう定義で参加してるから (2B-A) ”、

こうした回答者の意見を読み解くと、過去の先行研究と同様に、日本人にとって、ボランティア活動は「自由意思に基づいて、自発的に奉仕活動をする

人」(入江, 1999, p.6) という考え方が深く根付いている可能性が考えられる。スポーツにおいても、もともと自由時間における自発的な行為 (voluntary action) によって生まれた人類固有の文化であることから (山口, 2008)、自発的な行為として、スポーツイベントにおいてボランティア活動を行っていることが示唆される。

特徴3：利他性 (Altruistic)

ボランティアの特徴として、3番目に回答者の意見が多かったのは、利他性である。特徴1から3に関しては、日本文化に限らず、欧米などの文化圏と類似したボランティアの特徴といえる。回答例は、以下の通りである。

“自分のことじゃなくて人のためっていうのが大前提にあるんですけど、基本的には皆さんから元気をいただきたい (1C-B) ”、“対象に対して思いやりがある人。自己本位ではない (1C-D) ”、“地域に貢献っていうのがよく言われるんですけど、これは同じで、会社でそういう役割で参加しているということで (2B-C) ”、“いろんなものを求めないっていうのがボランティアかなって思います (2D-A) ”

こうした回答者の意見を読み解くと、自分のためというより、他人のため、社会のためにボランティア活動を行うというのが見て取れる。北米などでは、他人のために何かをするという利他的な動機はあまり重要ではなく、自己の個人的なベネフィットのためにボランティア活動を行っている人が多いとされている (松岡・小笠原, 2002)。一方日本人のこうした考え方は、文化的自己観における相互協調的自己観によって説明することができ、「人間を究極的に動かしているのは、その人の個人的な望みや希望ではなく、まわりの人や社会からその人に求められている役割や期待なのだという考え方」(Markus & Kitayama, 1991, p. 39) である。伊藤ら (2016) は、日本人とカナダ間における青年の野外レクリエーション行動における参加動機と阻害要因の類似・相違性を比較した結果、カナダ人は日本人より自立といった参加動機を強調する一方、日本人はカナダ人に比べ対人的な阻害はあまり感じていないという研究結果を明らかにしている。つまり、日本人は欧米などの文化圏に比べ、ボランティア参加における利他性を重要視していることが示唆される。

特徴4：人助け (Helping people)

ボランティアの特徴として、4番目に回答者の意見が多かったのは、人助けである。特徴3の利他性

と類似したボランティアの特徴といえるが、日本人にとって、利他性のなかでも、特に人助けがボランティア活動において重要だと考えられている。回答例は、以下の通りである。

“苦勞してる、苦しんでる人たちを助けたいというようなボランティア (1A-B) ”、“協力、人助けとか (1B-B) ”、“単純に人のために何かしてあげたい (1C-B) ”、“私は、ちょっと困っている人がいたらでしゃばりで手を出したがるんですね (2A-B) ”、“単に何も無い気持ちで、お互いに楽しく助け合えたらいいかなって感じで参加していたんでね (2D-A) ”

こうした回答者の意見を読み解くと、ボランティア活動を通し、苦しんでいる人を助けることで、自分自身の快楽や満足感に繋がっていることが推察される。上記でも述べたが、欧米などの文化圏では、他人より自己の利己的動機を重視するが、日本人は、相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) の考え方からすると、自己の幸せを含めた他人の幸せが人とのつながりを生み出し、その中で協調的關係が維持されていることが示唆される。

特徴5：自己犠牲 (Self-sacrifice)

ボランティアの特徴として、5番目に回答者の意見が多かったのは、自己犠牲である。日本人のこうした考え方は、欧米などの文化圏ではあまり持ち合わせていない考え方であり、自己犠牲というネガティブなワードをボランティア活動に含めている点は日本人の特異性だと考えられる。入江ら (2007) によると、ボランティア活動への参加の動機やきっかけも、従来の自己犠牲的あるいは献身的な動機から、自身の充実感とそれに付随した楽しみや喜びが主流になってきたと報告している。しかしながら、日本人のボランティア像として、現代においても自己犠牲という特徴が含まれている点は忘れてはならない。回答例は、以下の通りである。

“ボランティアってのは、自己犠牲してるみたいなイメージがあるじゃないですか。色んなボランティアがあるんで、そういう一面もあるんだけど、スポーツについてはそうじゃないっていうのをね (1B-C) ”、“何かを犠牲にしなれば何かをできないから。何かを犠牲にしなきゃいけないとか思うので、妨げになるっていうのはやっぱり家族じゃないかな (1C-B) ”、“周りの人はみんな、「休みの日をつぶしてまで、偉いなー」っていうの言ってくれます (2B-B) ”、“人が嫌がることも率先してやるっていうのがね、すごいなあって思いましたね (2D-A) ”

こうした回答者の意見を読み解くと、日本人のこうした自己犠牲の精神は、アンパンマンの人物像を連想することができる。アンパンマンは、自分はどうなってもいいから、困っている人を助けにいくというような自己犠牲の精神を持っている。児童用絵本の内容が理想とする感情の文化差に影響を与えると報告されているように (Tsai, Louie, Chen, & Uchida, 2007)、アンパンマンといった人気アニメも日本のボランティア概念に影響を及ぼしている可能性が推察される。日本は、「ボランティア元年」と称された1995年の阪神淡路大震災を契機に、ボランティア活動は大衆化していったが(山口, 2004)、いまだ「自己を犠牲にして他人に尽くす大変な活動」といった重い・暗いイメージが未だ色濃く残っていることが推察される。

一方、スポーツの場合は上記の回答者の意見にもあるように、自己犠牲の精神は色濃くなく、むしろ自身の達成感や喜びのためにボランティアを行っている人が多いことが示唆される。

特徴6：ゆとり (Breadth of mind)

ボランティアとしての特徴として、最後に回答者の意見が多かったのは、ゆとりである。大辞泉によると、ゆとりの意味は、物事に余裕があり窮屈でないこととされている(松村, 2012)。日本人のこうした考え方は、自己犠牲同様、欧米諸国にはあまりない考え方であり、相違性といえる。回答例は、以下の通りである。

“自分に余裕がないとあんまりボランティアってできないと思うんで、心とか時間に余裕がある人がボランティアに向いていると思いますね(1A-A)”、“個人にある程度余裕がないときできないことだから(1C-A)”、“自分のことしか考えられないうちはたぶんやれないと思うし。あと心の余裕(1C-A)”

こうした回答者の意見を読み解くと、日本人は、経済的にも精神的にも、多少のゆとりがないとボランティア活動を行うという動機には至らない可能性が示唆される。日本人のゆとりへの考え方は、価値意識が関係している可能性がある。Harada (1998)が労働は善(virtue)で余暇・レジャーは罪(sin)だと捉える風潮が戦後の経済復興期から長年存在していたと述べるように、日本人の価値意識として、労働が第一にあり、余暇・レジャーに位置づけられるボランティア活動は二の次と捉えられていることが窺える。このことから、仕事を引退した人や家庭から子どもが自立した人がボランテ

ィア活動に多く参加する一方で、若者がボランティア活動に対し消極的な考えを持っていることが日本の文化的な背景から示唆される。

その他、特徴的な意見として、“無償で自分から人間形成のために、ボランティア活動も学問と同じくらいに考えて取り組んでいったら、みんなもっと・・・だから、ボランティアって結局は奉仕活動みたいになっているので、人のためにではなくて、自分のためにやっていこうっていう人が増えたら、世の中色んな人いますけれど、もっと平和に心も豊かになるのではないかな、と思うのですけれども(2B-A)”といった回答者の意見が出た。この回答者の意見は、欧米などの文化圏の意見を反映しつつ、今後日本が向かっていかなければいけない方向性を示しているのかもしれない。日本人の価値意識として、労働が生活の中の多くを占める中で、余暇・レジャーとしてのボランティア活動を充実させることで、人としての幸福、豊かさ、生活の質が向上する可能性が示唆される。

4-2. 参加動機

本研究では、「地域スポーツイベントと全国・国際スポーツイベントでは、ボランティアの動機は異なるのか?」というリサーチ・クエスションのもと分析を行った。まず始めに、目的(1)と同様に参加動機のキーカテゴリーを生成した。その結果、4つのキーカテゴリーが生成された。(1)楽しい(Fun)、(2)相互利益(Mutual benefits)、(3)場所/コミュニティへの同一性(Place/Community identity)(4)貢献(Contribution)、である。具体的な回答例は、以下の通りである。

参加動機1：楽しい(Fun)

“スポーツボランティアは楽しまなきゃ(1A-B)”、“毎年思うんですけど、本当に楽しんですよ。毎年楽しさが増していく(1B-B)”、“選手に頑張れって言った時に、ありがとうと言われることがもうすごく楽しんです(1B-B)”、“自分が楽しまないと、楽しいのが一番(2A-A)”、“ぼくは今年で三回目なのですが、無事終了した後の達成感が。本当に。やっぱり、無料で自分がさせていただいたことに、やっぱり後の喜びがやっぱり大きいのですよね(2C-C)”

参加動機2：相互利益(Mutual benefits)

“触れ合いですね。やっぱりゴールする選手を楽しんで。それを応援するのも楽しまないと、選手が持ち上がらないと(1A-B)”、“全ての方と触れ合いですよね。去年はたまたま私なんかが一番端のほうに行っただけで、今年はないんですけど、例年結

構選手たちとハイタッチしてるんですよ(1B-C)”、“そのイベントに参加者と一緒に関わっていられるというか・・・一緒の気持ちになれるっていうか・・・そこに参加出来るっていう楽しみがあって参加しているという感じ(2B-B)”

参加動機3：場所／コミュニティへの同一性 (Place / Community identity)

“わざわざ来て館山で走りたいって言うてくださる方のために、地元民として協力できることがあればというのはあったので(1A-C)”、“私なんか本当に地元でやるから助けようっていう気持ち(1A-E)”、“近いっていうより、やっぱり地元だから盛り上げてやろう(1A-B)”、“地元のスポーツイベントでやりたいっていう気持ちですね(1A-A)”、“ボランティアのついでに紹介して、館山をいい感じにアピールしたいなって(1D-B)”、“興味と、自分の住んでるところ、街(1D-A)”

参加動機4：貢献 (Contribution)

“マラソン大会とか自分で選手として出るんですけど、トライアスロンはちょっと自分ではできないので、大会に参加するってなったら、ボランティアっていう方法があるなって(1A-A)”、“私は第2回で走って、今度は恩返しっていう気持ちでサポートできたらなって気持ちで(2B-A)”、“これやったら役立てるんちゃうか、役立てる場があるんやったら頑張ろうとかそういう気概というか、そういう強い思いみたいなもんですかね(2D-B)”

これらの参加動機のキーカテゴリーを館山わかしおトライアスロン大会と神戸マラソンで比較した結果、館山わかしおトライアスロン大会のボランティアは、「楽しい、相互利益、地域コミュニティへの同一性を披露することに動機づけられている」ことが示唆される。一方、神戸マラソンのボランティアは、「楽しさや自分自身のスキルと能力を通し社会に貢献することに動機づけられている」ことが推察される。よって、「地域スポーツイベントと全国・国際スポーツイベントでは、ボランティアの動機は異なる」ことが明らかとなった。

表1. 参加動機における類似・相違点のまとめ

	楽しい	相互利益	場所／コミュニティへの同一性	貢献
館山わかしおトライアスロン	◎	◎	◎	○
神戸マラソン	◎	○	×	◎

注) ◎非常にあてはまる、○あてはまる、×あてはまらない

5. まとめ

本研究では、(1) 日本におけるスポーツボランティアの概念を文化的な視点から探り出し、(2) スポーツボランティア参加者の動機を明らかにすることを目的に、館山わかしおトライアスロン大会と神戸マラソンのボランティアを対象に調査を実施した。フォーカスグループインタビューの結果、以下の4点が明らかとなった。

1. ボランティアの特徴は、(1) 無償性、(2) 自発性、(3) 利他性、(4) 人助け、(5) 自己犠牲、(6) ゆとりである。
2. ボランティアの参加動機は、(1) 楽しい、(2) 相互利益、(3) 場所／コミュニティへの同一性、(4) 貢献である。
3. 館山わかしおトライアスロン大会のボランティアは、楽しい、相互利益、地域コミュニティへの同一性を披露することに動機づけられている。
4. 神戸マラソンのボランティアは、楽しさや自分自身のスキルと能力を通し社会に貢献することに動機づけられている。

今後メガ・スポーツイベントに限らず、地域の様々なスポーツイベントにおいて、ボランティアの存在なしに、イベントを成功に導くことは難しく、今後、ボランティアマネジメントはより必要になることが予想される。主催者は、ボランティアの概念を明確にしつつ、ボランティアの参加動機を理解しながらマネジメントを行っていく必要がある。本研究がそうしたボランティアマネジメントの一役を担えれば幸いである。

参考文献

Attride-Stirling, J. (2001). Thematic networks: An analytic tool for qualitative research. *Qualitative Research, 1*(3), 385-405.

長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) : ボランティアの継続意欲の視点から. 鹿屋体育大学研究紀要, 6, 69-75.

Cuskelly, G., Hoye, R., & Auld, C. (2006). Working with volunteers in sport. London: Routledge.

Fairley, S., Lee, Y., Green, B. C., & Kim, M. L. (2013). Considering cultural influences in volunteer satisfaction and commitment. *Event Management, 17*(4), 337-348.

Fairley, S., Gardiner, S., & Filo, K. (2016). The

- spirit lives on: The legacy of volunteering at the Sydney 2000 Olympic Games. *Event Management*, 20, 201-215.
- Fairley, S., Cardillo, M., & Filo, K. (2016). Engaging volunteers from regional communities: Non-host city resident perceptions towards a mega-event and the opportunities to volunteer. *Event Management*, 20, 433-447.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research. Chicago, IL: Aldine.
- Harada, M. (1998). Changing relationship between work and leisure after the "bubble economy" in Japan. *Loisir et Societe/Society and Leisure*, 21, 195-212.
- Hustinx, L., Handy, F., & Cnaan, R. A., (2012). Student volunteering in China and Canada: Comparative perspectives. *Canadian Journal of Sociology*, 37(1), 55-84.
- 伊藤央二・山口志郎・岡安功・北村薫・Walker, G. J. (2016) 青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が過去の野外レクリエーション参加頻度に与える影響: 文化的自己観に基づく日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討. 体育学研究, 61(1), 11-27.
- 入江幸男 (1999) ボランティアの思想. 内海成治・入江幸男編. ボランティア学を学ぶ人のために. 世界思想社: 京都.
- 入江詩子・佐藤快信・菅原良子 (2007) ボランティアと生涯学習との接点. 現代社会学紀要, 5(1), 51-62.
- Kemp, S. (2002). The hidden workforce: Volunteers' learning in the Olympic. *Journal of European Industrial training*, 26, 109-116.
- 神戸新聞 (2016) 神戸マラソン海外でも人気? 外国人ランナー倍増. <http://www.kobe-np.co.jp/news/shakai/201611/0009671110.shtml> (参照日: 2017年2月24日)
- Krueger, R. A. (1986). Focus group interviewing: A helpful technique for agricultural educators. *The Visitor*, 73(7), 1-4.
- Li, M., Pitts, B., & Quarterman, J. (2008). Research methods in sport management. Morgantown, WV: Fitness Information Technology.
- Lovegrove, H., & Fairley, S. (2017). Using equity theory to understand non-host city residents' perceptions of a mega-event. *Journal of Sport & Tourism*, 21, 1-14.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, 98(2), 224-253.
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学, 52, 277-284.
- 松村明 (2012) 大辞泉第2版. 小学館: 東京.
- 日本スポーツボランティア学会 (2008) スポーツボランティア・ハンドブック. 明和出版: 東京.
- 日本スポーツボランティアネットワーク (2015) 日本スポーツボランティアネットワーク会員団体の登録者 およびスポーツボランティア養成プログラム受講者に対する スポーツボランティア意識調査. 日本スポーツボランティアネットワーク: 東京.
- 笹川スポーツ財団 (2014) スポーツライフ・データ 2014. 笹川スポーツ財団: 東京.
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法: 原理・方法・実践. 新曜社: 東京.
- 塩田琴美・徳井亜加根 (2016) 障がい者スポーツにおけるボランティア参加に影響を与える要因の検討. 体育学研究, 61(1), 149-158.
- 寺澤幸恭 (2002) 一年志願兵制度と学校教育: プロイセン・ドイツと日本. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 34, 1-19.
- 山口志郎・野川春夫・山口泰雄 (2010) 総合型地域スポーツクラブにおけるボランティアマネジメントに関する研究: 設立形態が異なる3クラブに着目して. 体育・スポーツ科学, 19, 33-41.
- 山口泰雄 (2004) スポーツ・ボランティアへの招待. 世界思想社: 東京.
- 山口泰雄 (2008) スポーツイベントと市民参加: スポーツボランティアの可能性. 都市問題研究, 60(11), 65-79.
- 田尾雅夫 (2001) ボランティアを支える思想: 超高齢化社会とボランティア. アルヒーフ: 東京.
- Tsai, J. L., Louie, J Y., Chen, E. E., & Uchida, Y. (2007). Learning what feelings to desire: Socialization of ideal affect through children's storybooks. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 17-30.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

